

昭和52年度秋冬作野菜花き関係 除草剤・生育調節剤試験成績概要

農林水産省野菜試験場 西 貞夫

標記の検討会は、去る7月3～4日の両日、広島県佐伯郡廿日市町の、‘のうが高原ホテル’において行われた。広島県は古くから、中国地方では有数の野菜産地であり、除草剤についても、CAT・CIPCの昔から、野菜に関しては草分け的な存在であった事が、今回の検討会を、この地に選んだ理由である。

今回は、比較的検討すべき成績数が少なく、時間的な余裕があったので、第1日の3日は、午前中を現地見学に当てた。広島市周辺の近郊野菜は、御多分にもれず、急速に減少しつつあるが、その中であって砂質地という特殊な条件を生かし、多年連作をつづけて大きな収益をあげている、‘観音ネギ’が第1の目的地となった。ビルや住宅の中に、‘点々と’という表現にぴったりした状態で栽培されているのであるが、その収益を聞かされて、一同已のそれをひそかに思いやる一幕もあった。ついで佐伯町に向い、年間3,000万円の収益をあげると伝えられる、‘向井農園・水耕ミツバ施設団地’を見学した。同団地は、ミツバを主体とする、いわゆる軟弱野菜の水耕栽培で、独自の経営体系を作りあげ、企業的野菜生産の典型として、数多くの賞をうけている。個人経営によるもので、除草剤とは直接的な関係をもつものではないが、野菜栽培についての知見を深める意味で、今回の見学コースの中心とされたものである。従来行ってきた水耕ミツバ栽培の経営が、一応の安

定をみた同農園では、3年前から約9km離れた山間地に、新しく9haの畑地を造成し、‘鹿道農場’と名付けて大型経営を開始し、大型ガラス室2棟（2000 m²）を加えた野菜の複合経営を進めている。同農場では、露地栽培が中心であるため、除草剤の利用が大きな課題となっており、フランスから導入したという大型スプリンクラー（散水半径最大80 m）のデモンストラーションとともに、栽培上の問題点などが紹介された。雑草に関係した問題として指摘されたのは、たい・厩肥利用に伴うそれであって、有機質源として、生の牛糞や豚糞を施用すると、きわめて大量の雑草が発生し、防除不可能にまでなるということであつた。十分に腐熟させたものでは問題ないが、糞の入手先との作業関係、腐熟場所との関係などから、しばしば生糞の施用されることが多く、同様のトラブルは、有機質施用の強調される昨今（糞の利用は、畜産農家側からみると、糞を処分する手段であるから）、各地で起こっているやに聞く。有機質資材の問題であつて、除草剤と関係ないというような気もするが、現実には大変厄介な問題であり、検討してみる必要もあろう。

向井農場での見学が、熱心なやりとりで予定以上に長引いた結果、会場のホテルへの到着も予定を大幅に遅れたが、昼食時間を切りつめて、午後1時半から検討会を行った。

今回は、除草剤関係成績が19、生育調節剤6

(内花き関係3)にとどまり、ほかに前回未検討成績6が加わった。従って参加人員も例年より少なく、試験場が24場所;29人、メーカー側が22社;29人であった。又今回の試験成績の中

には、すでに判定の与えられた薬剤の効果・適用性確認のための試験が多く、その結果新たに実用化あるいは実・継の判定が与えられたものは、除草剤2例、生育調節剤2例、のみであった。

昭和52年度 秋冬作野菜花き関係除草剤・生育調節剤試験薬剤一覧ならびに判定表

I. 除 草 剤 (含資材)

対象作物名 〔作型・栽培法〕	薬剤名・剤型 ● 種類名 ○ 商品名	有効成分 および含有率	委託者名	試験実施 場 所	試験の種類 および、ねらい	処理方法;処理 時期;散布薬量 (製品/a)	新継の別 今回判定	判 定 理 由 または内容
1.野菜一般	(1) OG-119 乳 剤 ● ○	2'-エチル-6'- メチル-N- (2-メトキシ- 1-メチル・エ チル)-クロル アセトアニリド 50%	日本チバ ガイギー	野菜試験岡 支場, 同久 留米支場. (2)	〔基礎試験〕 適用作物, 処 理時期, 処理 薬量について 検討.	土壌表面処理; は種後全面土壌 処理, 定植後う ね間, 株間土壌 処理; 20, 30, 40 ml.	新 継	試験年次 不足.
2.ハクサイ 〔夏~秋ま き露地移 植〕	(1) S-28 乳 剤 ●メタクレ ホス ○クレマー ト	0-エチル-0 -(3-メチル -6-ニトロフ ェニル)-N- セカンダリー ブチルホスホ ロチオアミデート 50%	Uークレ マート研 究会 〔サンケ イ化学, 中外製 薬, 日 本農薬 北興化 工業 山本農 薬, 住 友化学 工業(事)〕	① 茨城園 試, ② 兵庫農 総センタ ー淡路分 場. (2)	〔適用性試験〕 薬量・処理法 ・品種と薬害 の関係につ いて.	全面土壌処理; 定植前 〔①植穴 前 ②植穴後〕 ①〔火山灰土〕 15, 30ml ②〔非火山灰 土〕30, 40ml.	継 (実・継)	前回判定通 り. 実:〔夏~ 秋まき露 地移植〕 定植前, 15~40 ml, 全面 土壌処理. 継:薬量・ 品種と薬 害につい て.
3.レタス 〔秋まきト ンネルマ ルチ移植〕	(1) NK-049 水 和 剤 ●メトキシ フェノン ○カヤメト ン	3,3'-ジメチル -4-メトキシ ベンゾフェノ ン 50%	日本化薬	千葉農試南 総園研, 静 岡農試遠州 園芸分場, 香川農試, 福岡園試. (4)	〔適用性試験〕 早播栽培地域 における薬害 の右無の確認.	全面土壌処理; 定植前・マルチ 前; 60, 80, 100g.	継 (実・継)	前回判定通 り. 実:定植前 マルチ前, 60~ 100g, 全面土壌 処理. 継:処理時 期と薬害 について.
4.タマネギ 〔移 植〕	(1) MB-78 水 和 剤 ● ○	未 公 開 25%	丸和バイ オケミカ ル	愛知農総試 園研, 兵庫 農総センタ ー淡路分場,	〔適用性試験〕 効果と薬害の 確認.	全面土壌処理; 定植活着後及び 春期生育期(雑 草発芽前)の反	新 継	成分未公開. 試験年次不 足.

対象作物名 〔作型・栽培法〕	薬剤名・剤型 ● 種類名 ○ 商品名	有効成分 および含有率	委託者名	試験実施 場 所	試験の種類 および、ねらい	処理方法；処理 時期；散布薬量 (製品/a)	新継の別 今回判定	判定理由 または内容
4.タマネギ (つづき)				福岡園試。 (3)		覆処理；30, 40, 50g.		
〔慣行移植〕	(2) MOUH 水和剤 ● _____ ○ _____	・MO-338； 2,4,6-トリ クロロフェニ ル-4-ニト ロフェニルエ ーテル 50% ・リニュロン； 3-(3,4- ジクロロフェ ニル)-1- メトキシ-1 -メチルウレ ア 10%	三井東圧 化学	静岡農試， 愛知農総試 園研，兵庫 農総センタ ー淡路分場。	〔適用性試験〕 適用性（効果 ・薬害）の検 討。	全面土壌処理； 移植活着後（雑 草発生前〔秋処 理〕）；40, 50, 60g.	継 継	試験結果不 一致。 (薬害の発 生条件の 検討)
〔慣行移植〕	(3) MOUH 水和剤 ● _____ ○ _____	・MO-338； 2,4,6-トリ クロロフェニ ル-4-ニト ロフェニルエ ーテル 50% ・リニュロン； 3-(3,4- ジクロロフェ ニル)-1- メトキシ-1 -メチルウレ ア 10%	三井東圧 化学	愛知農総試 園研，和歌 山農試，香 川農試，佐 賀農試。 (4)	〔適用性試験〕 春季処理剤と しての適用性 (効果・薬害) の検討。	全面土壌処理； 春季雑草発生前 〔春処理〕；40, 50, 60g.	新 継	試験年次 不足。
〔秋まき移 植〕 本 畑； 水田裏作	(4) NP-48 Na 水 溶 剤 ● アロキシジ メドンNa ○ クサガー ド	2-(アリルオ キシアミノブチ リデン)-5,5- ジメチル-4- メトキシカル ボニル-シクロ ヘキサン-1,3- ジオンNa 塩 75%	日本曹達	岐阜農試， 和歌山農試， 兵庫農総セ ンター淡路 分場，福岡 園試，佐賀 農試。	〔適用性試験〕 茎葉処理によ るスズメノテ ッポウ防除お よび体系（混 剤）化での全 雑草防除。	茎葉処理（体系 処理）；定植活 着後および雑草 3～4 L期；CI -IPC30ml又 はCAT10g → NP-48Na 10 g，雑草3～4 L期；CI-IPC 30ml 又はアイ オキシニル+NP -48Na10g，雑 草3～4 L期， NP-48Na 10 g.	継 実・継	実：〔秋ま き移植本 畑〕 活着後， 7～10g， 全面雑草 処理，但 イネ科優 占は場， 雑草3～ 4葉まで。 継：他剤と の混用， 体系処理 について。

対象作物名 〔作型・栽培法〕	薬剤名・剤型 ● 種類 名 ○ 商品 名	有効成分 および含有率	委託者名	試験実施 場 所	試験の種類 および、ねらい	処理方法；処理 時期；散布薬量 (製品/a)	新継の別 今回判定	判定理由 または内容
4.タマネギ (つづき) 〔秋まき移植〕	(5) S-28 乳 剤 ● ノタクレ ホス ○ クレマー ト	0-エチル-0 -(3-メチル -6-ニトロフ ェニル)-N- セカンダリー ブチルホスホ ロチオアミデート 50%	U-クレ マート研 究会 〔サンケ イ化学, 中外製 薬, 日 本農薬, 北興化 学工業, 山本農 薬, 住 友化学 工業〕	長野農総試 野菜花き試, 佐賀農試.	〔適用性試験〕 処理時期と薬 害について.	全面土壌処理(反 復)；秋処理は 定植後3時期(図 とし, 春処理は 秋処理各区にタ マネギ生育ステ ージ別(雑草発 生前)処理; 30 ml(秋処理), 40ml(春処理).	継 (実)	前回判定通 り. 〔秋まき移 植本畑〕 定植後およ び春季雑草 発生前, 20 ~40ml, 反復全面土 壌処理.
〔移植・露 地〕	(6) YH-90 水 和 剤 ● PAC・シ アナジン ○ ホレック ス	・PAC; 1- フェニル-4 -アミノ-5 -クロロピリ タゾーン-6 20.0 % ・シアナジン; 2-(4-ク ロル-6-エ チルアミノ- S-トリアジ ン-2-イル -アミノ)- 2-メチルプ ロピオニトリ ル 5.0 %	山本農薬	愛知農総試 園研, 和歌 山農試, 兵 庫農総セン ター淡路分 場.	〔適用性試験〕 体系処理にお ける秋季処理 の除草効果及 び安全性の確 認.	全面土壌処理; 定植活着後; 40, 50, 60g.	継 (実・継)	前回判定通 り. 実: 〔秋ま き移植本 畑〕 活着後, 40~60 g, 全面 土壌処理. 継: 薬量と 薬害およ び反復処 理について.
〔移植露地〕	(7) YH-90 水 和 剤 ● PAC・シ アナジン ○ ホレック ス	・PAC; 1- フェニル-4 -アミノ-5 -クロロピリ タゾーン-6 20.0 % ・シアナジン; 2-(4-ク ロル-6-エ チルアミノ- S-トリアジ ン-2-イル -アミノ)- 2-メチルプ ロピオニトリ ル 5.0 %	山本農薬	愛知農総試 園研, 岐阜 農試, 和歌 山農試, 兵 庫農総セン ター淡路分 場, 福岡園 試. (5)	〔適用性試験〕 体系処理にお ける春期処理 の除草効果, (特に広葉雑 草への効果) 及び安定性の 確認.	全面土壌処理; 春季生育期(雑 草発生始期); 40, 50, 60g.	継 実・継	実: 〔秋ま き移植本 畑〕 春季生育 期(雑草 発生始期 前), 40 ~60g, 全面土壌 処理. 継: 土壌条 件・薬量 と薬害の 関係につ いて.

対象作物名 〔作型・栽培法〕	薬剤名・剤型 ● 種類名 ○ 商品名	有効成分 および含有率	委託者名	試験実施 場 所	試験の種類 および、ねらい	処理方法；処理 時期；散布薬量 (製品/a)	新継の別 今回判定	判定理由 または内容
5. ラッキョウ 〔秋まき移植・慣行〕	(1) トリブニール水和剤 ● メタベンズチアズロン ○	1-(2-ベンゾチアゾリル)-1,3-ジメチル尿素 70%	日本特殊農薬製造	栃木農試、福井農試、鳥取野菜試。(3)	〔適用性試験〕効果確認、薬害の有無。	反復全面土壌表面処理；植付活着後及び春季生育期；20+30, 30+30, 40+30g.	継 (実・継)	前回判定通り。 実：〔露地普通〕活着後、20～40g、および春季雑草発生前～2, 3葉期、30g反復全面土壌処理。 継：薬量・土壌条件と薬害・除草効果について。
〔秋まき移植・慣行〕	(2) トリフルラリン乳剤 ● トリフルラリン ○ トレファノサイド	α, α, α-トリフルオール-2, 6-ジニトロ-N, N-ジプロピルパラートルイジン 44.5%	塩野義製薬	茨城園試、福井園試、鹿児島農試大隅支場。(3)	〔適用性試験〕薬害と除草効果について(特に薬量を低くしたときの除草効果)。	土壌処理(反復処理)；植付後(9～10月)および春季融雪後(3～4月)；雑草発生前；20, 25, 30ml.	継 (実・継)	前回判定通り。 実：〔露地普通〕植付後および春季雑草発生前、20～40ml、反復全面土壌処理。 継：薬量・土壌条件と薬害・除草効果について。
〔一般慣行〕	(3) トリフルラリン粒剤 ● トリフルラリン ○ トレファノサイド	α, α, α-トリフルオール-2, 6-ジニトロ-N, N-ジプロピルパラートルイジン 2.5%	塩野義製薬	茨城園試、福井農試、鹿児島農試大隅支場。(3)	〔適用性試験〕薬害と除草効果について検討。	土壌処理；植付後(9～10月)および春季融雪後(3～4月)、雑草発生前；400, 500, 600g.	継 (実・継)	前回判定通り。 実：〔露地普通〕植付後および春季雑草発生前、400～600g、反復全面土壌処理。 継：薬量・土壌条件と薬害・除草効果について。

対象作物名 〔作型・ 栽培法〕	薬剤名・剤型 ● 種類名 ○ 商品名	有効成分 および含有率	委託者名	試験実施 場所	試験の種類 およびねらい	処理方法；処理 時期；散布薬量 (製品/a)	新継の別 今回判定	判 定 理 由 または内容
6.ニンニク 〔秋まき移 植・慣行〕	(1) トリブニ ール 水和剤 ● メタベン ズチアズ ウロン ○ _____	1-(2-ベン ゾチアゾリル) -1,3-ジメチ ル尿素 70%	日本特殊 農薬製造	岩手園試, 愛知農総試 園研, 佐賀 農試, 長崎 総農試. (4)	〔適用性試験〕 効果確認, 薬 害の有無.	反復全面土壌処 理; 植付活着後, 春季生育期; 20 + 30, 30 + 30, 40 + 30g.	継 (実・継)	前回判定通 り. 実:〔露地 普通〕活 着後, 20 ~40g, および春 季雑草発 生前~2, 3葉期, 反復全面 土壌処理. 継: 葉量・ 土壌条件 と薬害・ 除草効果 について.
7.イ チ ゴ 〔ハウスマ ルチ; 本 畑〕	(1) ANK-553 乳 剤 ● ベンディ メサリン ○ _____	N-(1-エチ ルプロピル) 3, 4-ジメチル- 2,6-ジニトロ ベンゼンアミン 30%	ANK研 究 会 〔クミア イ化学 工業, 日本農 薬, 日 本サイ アナミ ッド(株),	野菜試久留 米支場, 静 岡農試, 福 岡園試. (3)	〔適用性試験〕 品種に対する 適用性の検討.	全面土壌処理; 活着後マルチ前 処理; 20, 30, 40ml.	継 (実・継)	前回判定通 り. 実:〔促成 または半 促成ハウ スマルチ 本畑〕活 着後マル チ前, 20 ~40ml, 全面土壌 処理. 継: 地域お よび品種 間差異に ついて.
〔ハウスマ ルチ本畑〕	(2) S-28 乳 剤 ● メタクレ ホス ○ クレマー ト	0-エチル-0 -(3-メチル -6-ニトロフ ェニル)-N- セカンダリー ブチルホスホ ロチオアミデ ート 50%	U-クレ マート研 究会 〔サンケ イ化学, 中外製 薬, 日 本農薬, 北興化 学工業 山本農 薬, 住 友化学 工業(株),	野菜試久留 米支場, 栃 木農試栃木 分場, 岐阜 農試. (3)	〔適用性試験〕 品種, 処理時 期と薬害につ いて.	全面土壌処理(2 回反復); 秋処理 は定植後3時期 (区)とし冬処 理は各区ともマ ルチ前1時期; 20, 40ml.	継 (実・継)	前回判定通 り. 実:〔促成 または半 促成ハウ スマルチ 本畑〕定 植後およ びマルチ 前, 20~ 40ml, 反復全面 土壌処理. 継: 品種・ 処理時期 と薬害に ついて.

対象作物名 〔作型・栽培法〕	薬剤名・剤型 ● 種類名 ○ 商品名	有効成分 および含有率	委託者名	試験実施 場 所	試験の種類 および、ねらい	処理方法；処理 時期；散布葉量 (製品/a)	新継の別 今回判定	判定理由 または内容
7.イチゴ (つづき) 〔ハウス半 促成〕	(3) SL-55 水和剤 ● _____ ○ _____	2-クロロ-4- トリフルオル メチルフェニル -4-ニトロフ ェニルエーテル 40%	石原産業	栃木農試 栃 木分場、埼 玉園試、神 奈川園試、 岐阜農試、 佐賀農試、 (5)	〔適用性試験〕 除草効果の持 続期間につい て、	全面土壌処理； 定植前；10, 15, 20g.	継 (実・継)	前回判定通 り。 実：〔半促 成ハウス マルチ木 畑〕 定植前マ ルチ前、 10~15 g, 全面 土壌処理。 継：除草効 果の持続 期間につ いて、
8.ニンジン 〔冬まきト ンネルマル チ〕	(1) S-28 乳 剤 ● メタクレ ホス ○ クレマー ト	0-エチル-0 - (3-メチル -6-ニトロフ ェニル) -N- セカンダリーブチ ルホスホロチオ アミデート 50%	Uークレ マート研 究会 〔サンケ イ化学、 中外製 薬、日 本農薬、 北興化 学工業、 山本農 薬、住 友化学 工業(株) 〕	埼玉園試入 間川支場、 長崎総農試、 (2)	〔適用性試験〕 処理時期・温 度と葉害につ いて、 (マルチフィ ルム2種類)	全面土壌処理； は種前3日、は 種後3日、発芽直 後；(20), 40 ml.	継 (実・継)	前回判定通 り。 実：〔冬ま きトンネ ルマルチ〕 は種前マ ルチ前、 20~40 ml, 全面 土壌処理。 継：温度と 葉害につ いて、
9.レタス 〔(トンネ ル) マル チ〕	(1) ジフェナ ミド添加 フィルム ● ジフェナ ミド添加 フィルム ○ エナイド シート	N, N-ジメチ ル-2,2-ジフ ェニルアセトア ミド 10, 20g/a.	三菱油化、 みかど化 工、(日本 アップジ ョン)	茨城園試、 埼玉園試、 千葉農試南 総園研。	〔適用性試験〕 レタスに対す るエナイドお よびエナイド シートの適用 性試験。	全面土壌被覆処 理；定植前； (10, 20g).	新 継	試験年次 不足。

II 野菜対象生育調節剤(含資材)

対象作物名 〔作型・栽培法〕	薬剤名・剤型 ● 種類名 ○ 商品名	有効成分 および含有率	委託者名	試験実施 場 所	試験の種類 および、ねらい	処理方法；処理 時期；散布葉量 (製品/a)	新継の別 今回判定	判定理由 または内容
1.イチゴ (トンネル マルチ)	(1) カルパー 粒 剤 ● 過酸化カル シウム	過酸化カルシウ ム 50%	カルパー 普及会 〔保土谷 化学工業、日 〕	埼玉園試、 兵庫農試セ ンター農試、 佐賀農試。	〔適用性試験〕 移植後の初期 生育の安定化。	全面土壌混和処 理；移植直前； 0.5, 1.0, 2.0 kg.	新 継	試験年次 不足。

対象作物名 〔作型・栽培法〕	薬剤名・剤型 ● 種類名 ○ 商品名	有効成分 および含有率	委託者名	試験実施 場 所	試験の種類 および、ねらい	処理方法；処理 時期；散布薬量 (製品/a)	新継の別 今回判定	判定理由 または内容
1.イチゴ (つづき)	○カルパー 粒剤		本バー オキサ イド、 日本化 薬(株)					
2.パレインヨ	(1) エスレル +ジベレ リン 液 剤 ● _____ ○ _____	エスレル(2- クロロエチルホ スホン酸 10% ジベレリン 0.5%)	2,4-D 協 議 会 〔日産化 学工業、 石原産 業、協 和醗酵 工業。〕	広島農試と うしよ部試 験地、長崎 総農林試愛 野馬鈴薯試 験地。 (2)	〔適用性試験〕 種いもの休眠 打破、萌芽促 進。	種いものを浸漬し てから定植する。	新 継	試験年次 不足。
3.ダイコン	(1)〔ポリエチ レン+Ca O ₃ 〕フ ィルム ● _____ ○ サンプラ ックマル チ	ポリエチレン } 混合物 炭酸カル粉末 } のフ ィルム	日産化学 工 業	山梨農試。 (1)	栽培試験(フ ィルム使用後 すき込みによ る後作物に対 する影響)。	フィルムを約5 cm 角に切断し、 深さ30cm 程度 になるべく均一 に鋤込み、比較 試験する。	継 継	試験例数 不足。

III. 花き対象生育調節剤

対象作物名 〔作型・栽培法〕	薬剤名・剤型 ● 種類名 ○ 商品名	有効成分 および含有率	委託者名	試験実施 場 所	試験の種類 および、ねらい	処理方法；処理 時期；散布薬量 (製品/a)	新継の別 今回判定	判定理由 または内容
1.チューリ ップ (温 室)	(1) ベンジル アデニン 液剤 ● カイネチ ン ○ ヘルボス	6-(N-ベン ジル) アミノプ リン 25~100ppm	興 人	埼玉園試。 (1)	〔適用性試験〕 プラスチック 防止、品質 改善試験、促 成栽培に於け るプラスチック 防止による 収率アップ と花の品質改 善。	滴下処理；低温 処理した球根を 温室に定植(11 月以降)し、最 低14℃で栽培し 草丈10cm 前後 のものに処理す る；20, 50, 100ppm液、1 ml。	継 継	試験例数 不足。
2.洋 ラン 〔アンドロ ビウム〕 (温 室・鉢 植)	(1) ベンジル アデニン 液剤 ● カイネチ ン ○ ヘルボス	6-(N-ベン ジル) アミノプ リン 400ppm	興 人	愛知農総試 園研。 (1)	〔適用性試験〕 開花促進と着 花数増加。	噴霧処理；出来 るだけ若い株、 (2年目以降) を使用し9月~ 11月処理；400 ppm。	継 継	試験例数 不足。
3.サボテン 〔シャコバ〕	(1) ベンジル アデニン	6-(N-ベン ジル) アミノプ	興 人	埼玉園試、 愛知農総試	〔適用性試験〕 着らい数、開	噴霧処理；短日 処理後5, 10,	継 実・継	実：〔シャ コバサボ

対象作物名 〔作型・栽培法〕	薬剤名・剤型 ● 種類名 ○ 商品名	有効成分 および含有率	委託者名	試験実施 場 所	試験の種類 および、ねらい	処理方法；処理 時期；散布葉量 (製品／a)	新継の別 今回判定	判定理由 または内容
サボテン〕 (温室・鉢 植) (つづき)	液 剤 ● カイネチ ン ○ ヘルボス	リン 100 ～ 200 ppm.		國研、 (2)	花数の増加、	15日処理；100、 200ppm.		テン〕 短 日処理開 始5～10 日後、100 ～ 200 ppm／7 ～10ml ／株、全 面散布 (高温期 散布はさ ける)。、 継：温度条 件、株の 生育との 関係につ いて、

IV. 前回未検討花き対象生育調節剤

対象作物名 〔作型・栽培法〕	薬剤名・剤型 ● 種類名 ○ 商品名	有効成分 および含有率	委託者名	試験実施 場 所	試験の種類 および、ねらい	処理方法；処理 時期；散布葉量 (製品／a)	新継の別 今回判定	判定理由 または内容
1.ポインセ チア <S 52. 春夏>	(1) CCC 液 剤 ● Chlor- mequat (草たけ抑 制) ○ サイコセ ル	(2-クロロエ チル)-トリメ チル-アンモニ ウムクロライド 46%	三 共、 日本サイ アナミド、	千葉農試、 東京農試、 (2)	〔適用性試験〕 草たけの伸長 抑制、	茎葉(全面)散 布9月下旬；株 当り、1000～ 3000ppm 液5 ～10ml、	新 【継】	【前回判定 済】 〔試験年次 不足〕、
2.草 花 類 <S 52. 春夏>	(1) AS-100 液 剤 ● (発芽、 発根、生 育促進効 果) ○ _____	未 公 開	旭 化 学 工 業、	千葉暖地園 試、大阪農 技センター、 (神奈川園 試は前回提 出済)、 (2)	〔適用性試験〕 種子浸漬によ る発芽・発根 促進および定 植後かん水同 時処理による 生育促進効果、	種子浸漬および かん水全面処理 ；①は種前種子 1,3,6 時間浸漬、 ②定植後かん水 時(定植0, 10, 20,30日後)100 倍液、	新 【継】	【前回判定 済】 〔試験年次 不足〕、
3.球根類な ど <S 52. 春夏>	(1) ACP - 68-250 ● GA 液 剤 ● (休眠打 破・萌芽 促進効果) ○ エスレル・ ジベレリン	エスレル：2- クロロエチル ホスホン酸 10% ジベレリン：ジ ベレリンA ₃ 0.5%	2,4-D 協議会、 協和醗酵 工業、	千葉暖地園 試、福岡園 試、 (埼玉園試 は前回提出 済一再録)、 (2)	〔適用性試験〕 球根の休眠打 破による萌芽 生育促進、	球根浸漬処理(散 布)；植付前…… エスレル250～ 500ppm、ジベ レリン10～100 ppm(定植後… エスレル1000 ～2000ppm、 ジベレリン100 ppm)、	継 継	試験例数 不足、

対象作物名 〔作型・ 栽培法〕	薬剤名・剤型 ● 種類名 ○ 商品名	有効成分 および含有率	委託者名	試験実施 場 所	試験の種類 および、ねらい	処理方法；処理 時期；散布薬量 (製品/a)	新継の別 今回判定	判定理由 または内容
4.洋ラン ＜S52. 春夏＞ 〔シンビジ ウム〕	(1) AS- 100液剤 ● (発芽・ 発根、生 育および 開花促進 効果) ○ _____	未 公 開	旭化学 工 業	岐阜農試、 (愛知農総 試園研、三 重農技セン ターは前回 提出済)。(1)	〔適用性試験〕 発芽、発根、 着らい等促 進、開花数 増加。	球根浸漬および かん注処理；植 付前およびかん 水時；50, 100 倍液。	新 【継】	【前回判定 済】 〔試験年次 不足〕。
5.花 木 類 ＜S52. 春夏＞ 〔Rhodode ndron属〕	(1) ATRINAL 液 剤 ● (花芽数 増加効果) ○ アトリナ ール	2, 3, 4, 6-ディ ーD-イソプロ ピリデン-2- ケト-ル-グロ ン酸ナトリウム 20%	日本ロシ ュ	野菜試久留 米支場、(三 重農技セン ター、福岡 園試は前回 提出済)。(1)	〔適用性試験〕 Rhododen dron 属花木 の花芽数増加。	(全面) 茎葉処 理；開花終了時 およびその1, 2 週間後1回；0.4, 0.6% (アザレ アは0.2, 0.3 %) 液5～10 ml/鉢。	継 【実・継】	【前回判定 済および 今回判定】 実用化：花 芽数増加 ークルメ ツツジ、 サツキ〕 開花終了 後2週間 以内(開 花開始期 ～2週間 後まで)、 0.4～0.6 %液5～ 10ml/2, 3年生苗 1回、全 面茎葉処 理。 継続：他の ツツジ類 およびサ ツキの品 種間差異 について。
6.洋ラン ＜S51. 秋冬＞ 〔デンドロ ビューム〕	(1) BL-531 液 剤 ● アンシミ ドール (草たけ 抑制) ○ スリトー ン	α-シクロプロ ピル-α-(P -メトキシフェ ニル)-3-ピ リミジンメタノ ール 0.025%	武田薬品 工 業	愛知農総試 園研、(埼 玉園試、岐 阜農試、三 重農技セン ターは前回 提出済)。(1)	〔適用性試験〕 草たけ抑制。	土壌かん注処理 ；発芽後草たけ 5cm以内；1.2 ml/5号鉢。	新 【継】	【前回判定 済】 〔試験年次 不足〕。

I. 除草剤(合資材)

1. 野菜一般

(1) CG-119乳剤(日本チバガイギー):
継続——試験年次不足.

酸アミド系, 50%の乳剤で, 非ホルモン系移行型薬剤である。メヒシバ・エノコログサ・スズメノカタビラ・ノビエ・ニワホコリ・ナズナ(極大), ツクサ・スベリヒユ(極大~大)シロザ・アカザ・イヌビユ・ハコベ・ノミノフスマ・オオイヌノフグリ(大~中)などの草種に有効であるが, いずれかというといネ科用除草剤である。雑草の発芽時に作用するが, 1~3葉期にも効果があり, 適期を誤らなければ, 生育期処理剤にもなる。土壤中の移行性は少なく, 残効性は長い。特にイネ科雑草には長い残効性を示すとされている。今回は初年度試験で, 適用作物に関する基礎試験を, 野菜試験岡支場(は種後全面土壌処理), 同久留米支場(は種後全面土壌処理, 定植後うね間・株間処理)が実施した。

盛岡支場では, ダイコン・ハクサイ・ハウレンソウ・エンドウの, 20~40mlのは種後全面土壌処理を行い, 各作物とも発芽に異常を認めず, 間引き量にも差を認めなかった。除草効果については, 申請書どおりイネ科雑草(メヒシバ・スベリヒユ)に高いものを認めたほか, スベリヒユ・ハコベにも十分な効果があった。しかしアカザに対しては効果が劣るようであり, 全体としては対照薬剤のラッソー15mlに対し, 本剤20mlの効果はほぼ同じ, 30ml以上ではまさるという結果であった。効果の持続期間も, 50日程度と申請どおり長かった。

久留米支場では, ダイコン・ハクサイ・ハウ

レンソウ・エンドウ・ニンジンについて, 20~40mlのは種後全面土壌処理を行った。発芽は各作物とも異常なかったが, 初期生育は, いずれも薬量に応じて抑制され, とくにハクサイでは生育停止株を生じた。試験は場の優占雑草は, ナズナ・スズメノカタビラ・イヌビユであったが, 20mlで十分な除草効果が認められた。定植後処理は, レタス・キャベツ・タマネギについて行われ, いずれも生育・収量に異常を認めず, スズメノカタビラ・オオイヌノフグリ・ナズナの優占するは場で, 各薬量とも高い除草効果を認めたが, その持続期間は翌春には及ばなかった。

初年度試験で試験継続となったが, 盛岡ではダイコン・ハクサイは20~40mlのは種後全面土壌処理で実用化可, エンドウ・ハウレンソウは, 実験条件の関係から有望, 薬量は生育の早い前2者では低薬量で可, 後2者には低~中薬量が適当としている。久留米では, は種後処理の場合ハクサイは不可, 他は20mlを中心に再検討, 定植後処理はレタスの場合20~40mlで実用化有望, キャベツ・タマネギでは同処理を, 体系あるいは反復処理を前提として有望と判定している。

2. ハクサイ

(1) S-28乳剤(U-クレマート研究会):
前回判定どおり.

昭和51年秋冬作で, 実・継, 実用化—[夏~秋まき露地移植・火山灰土・非火山灰土] 定植前15~40ml全面土壌処理, 継続—薬量・品種と薬害について, という判定を得ている。今回は, 定植前処理を, 植穴を掘る前に行うか, 掘った後に行うか, それと処理薬量との関係を中心に, 前回の継続条件が検討された。

茨城園試（ハコベ）では、処理後8日目ごろから本葉4～6枚目の葉縁に縮葉症状が認められ、その程度に品種間差があった。処理法と薬量・品種間にも関係があり、特に植穴掘後処理の高薬量（30ml）では、‘にしき’で30%程度の生育遅延が認められた。兵庫淡路（スズメノテッポウ・ノミノフスマ）では、3品種を用いて試験し、同株植穴掘後処理で生育遅延があり、処理量に応じ、13～20%の減収となった。除草効果については十分なので、15～30mlの定植前、植穴掘前全面土壌処理が良い、と結論されている。

3. レ タ ス

(1) **NK-049**水和剤（日本化薬）：前回判定どおり。

昭和51年秋冬作で、実・継、実用化―〔秋まきトンネルマルチ移植〕定植前・マルチ前60～100g 全面土壌処理、継続―処理時期と薬害について、という判定を得ている。今回は、効果の確認と薬害の有無について、再確認する試験が行われた。千葉農試南総園研・静岡農試遠州園芸分場・香川農試・福岡園試が試験を担当したが、レタスには生育・収量とも異常なく、除草効果にも問題なくて、前回の判定が支持される結果となった。

4. タ マ ネ ギ

(1) **MB-78**水和剤（丸和バイオケミカル）：継続―試験年次不足。

成分未公開、25%の水和剤で、光合成阻害作用を持っている。非ホルモン系・吸収移行型薬剤であるが、タネツケバナ・スズメノカタビラ・スズメノテッポウ・メヒシバ・ヒエ・ハコベ・アカザに効果大とされている。作用は発芽時に

見られ、全体としてはイネ科に有効ということである。土壌中の移行性は少なく、残効性の長い薬剤である。愛知農総試園研・兵庫農総センター農試淡路分場・福岡園試が、20・30・40gの活着後及び生育期反復全面土壌処理の試験を実施した。その結果、愛知では春処理による生育抑制と減収、兵庫淡路では秋・春とも葉の折損する薬害と減収、福岡でも秋処理で軽い生育抑制が、おのおの報ぜられた。除草効果は各場所とも顕著で、愛知と兵庫淡路では20gでも十分とされている。福岡では、30g以上で十分の効果が有り、その持続期間は20gで55日程度、30g以上で65日程度と報じている。兵庫淡路では、薬害のため実用性なしとしているが、他の2場所では20～40gの間で有望あるいは実用性ありとしている。

(2) **MOUH**水和剤（三井東圧化学）：継続―試験結果不一致（薬害の発生条件の検討）。

ジフェニルエーテル系のMO-338が50%、尿素系のリニュロン10%の混合剤で、昭和51年秋冬作から試験されている。前者は、接触型の除草剤で、発芽時に殺草効果を現わし、イネ科の方により除草効果が高く、ナデシコ科には無効という特性をもっている。後者は吸収型の除草剤で、発芽後の同化作用を抑制するが、広葉雑草に効果が高い。従って両母剤とも、発芽時に効果が最も大きく、1～3葉期には効果中という性格を持っている。土壌中の残効はともに長く、殺草スペクトラムの相補性によって、効果をあげようとするものである。残効性の大きいことから、秋まき移植栽培で、活着後の全面土壌処理による利用を目的としている。

40～60g処理を、静岡農試・愛知農総試園研・兵庫農総センター農試淡路分場で行った結果、静岡では薬害なく、40gでも十分な除草効果も

あるので、実用化可としたが、愛知では最終的な減収があるので、除草効果は高いが要再検討、兵庫淡路では、処理20日後ころから葉折れが著しく生育が遅れた。収量に対する害害はなく、秋雑草に対する除草効果も高いが、栽培者の心理的な問題として、実用性なし、としている。このように3者3様の結果となったので、試験継続の判定が与えられた。

(3) **MOUH水**和剤(三井東圧化学)：継続——試験年次不足。

前出薬剤の春季生育期全面土壌処理である。担当したのは、愛知農総試験園研・和歌山農試・香川農試・佐賀農試で、40～60gの処理が行われた。その結果、和歌山以下の3場所では、生育・収量に異常を認めなかったが、愛知では、処理後1か月の生育が処理区でやや劣り、収量もやや減収であった。しかし、薬量との間に一定の傾向は認められなかったとしている。除草効果については、40gではやや不足という報告もあるが、50g以上では非常に高い効果を全場所が報告している。従って40～60gの生育期全面土壌処理で実用化可という方向であったが、初年度の試験なので、試験継続と判定された。

(4) **NP-48Na** 水溶剤(日本曹達)：実・継、実用化——〔秋まき移植本畑〕活着後7～10g全面雑草処理、但しイネ科優占は場・雑草3～4葉まで、継続—他剤との混用・体系処理について。

ジメドン系75%の水溶剤で、イネ科雑草に特異的に作用し、生長点を枯死させる働きをもっている。同系の薬剤NP-24は、キャベツで実用化の判定を、昭和49年の春夏作で得ている。イネ科雑草のみに有効で、カヤツリグサ類、広葉雑草に無効ということなので、その利用場面は限定され、それなりの評価をすれば良いので

あるが、昭和48年来行われた同系列薬剤の試験では、ともすると全雑草が対象とされたため、‘効果なし・不足・不十分’という判定が多かった。水田裏作の場合や例外的にイネ科雑草の多い時には、十分実用性が考えられるし、申請者も他剤との併用あるいは混用を十分考慮している様なので、今回の判定となった。

試験を実施したのは、岐阜農試・和歌山農試・兵庫農総センター農試淡路分場・福岡園試で、秋処理にCAT・アクチノールを入れた春処理、および本剤の春処理などが行われた。その結果、CATの薬害が各場所で認められたが、本剤の秋活着後処理については、タマネギに異常なく、除草効果も本剤としての特長は十分発揮されているので、実用化と判定された。継続事項は本剤の特性から当然のものであるが、今回の結果からは、トリブニール・ハービスン・アイオキシニルなどと混用が可能であり、アイオキシニル秋処理との体系処理も可能なようである(いずれも試験年次不足)。

(5) **S-28** 乳剤(U-クレマート研究会)：前回判定どおり。

昭和49年秋冬作で、実用化——〔秋まき移植本畑〕定植後及び春季雑草発生前20～40ml反復全面土壌処理、の判定をうけている。今回は秋処理(30ml)の時期三つを選び、これに春処理(40ml)とを組み合わせ、薬害の有無から秋処理の適期を決定しようとしたものである。試験を行ったのは、長野野菜花き試、佐賀農試で、定植後7・14・21日の処理と春季を雑草発生前(場所によって異なる)処理にした試験を実施した。その結果、秋処理では定植後7日(ほぼ活着後に当る)、春処理は長野が雑草3～10葉期、佐賀が同2～4葉期に行うのがよいと判定している。春処理は、草種にもよるため、地方

により適期の差が考えられ、さらに検討が必要というコメント（長野）もあるが、全体としては前回判定が認められた形である。

(6) YH-70水和剤（山本農薬）：前回判定どおり。

昭和51年秋冬作において、実・継、実用化一〔秋まき移植本畑〕活着後40～60g全面土壌処理、継続一薬量と薬害・春処理及び反復処理について、という判定を得ている。今回は、薬量と薬害について再確認する試験が行われた。試験を実施したのは、愛知農総試園研・和歌山農試・兵庫農総センター農試淡路分場である。その結果、タマネギの生育・収量に差はなく、除草効果も40gでは、イネ科雑草（和歌山）、タデ（兵庫淡路）にやや不足であったが、50g以上では問題なく、前回判定で適当なことが再確認された。

(7) YH-70水和剤（山本農薬）：実・継、実用化一〔秋まき移植本畑〕春季生育期（雑草発生始期前）40～60g全面土壌処理、継続一土壌条件・薬量と薬害の関係について。

前出薬剤で、過去に行った試験は、手続き上の問題があって、春・秋別々に実施され、秋は必要試験年次条件に適合したが、春は不十分であったため、今回これを充足するための検討が行われた。試験を担当したのは、愛知農総試園研・岐阜農試・和歌山農試・兵庫農総センター農試淡路分場・福岡園試である。秋雑草は処理前、手取りが大部分で、岐阜・福岡ではCIPCとの体系処理が行われた。その結果タマネギについては、愛知・兵庫淡路でやや高薬量での減収を認めたほかは異常なく、除草効果は40gでやや不足（愛知・福岡）という例もあったが、薬量をふやせば十分という判定であった。愛知と兵庫淡路の減収は、外観的に異常を認めない

もので、理由が必ずしも分明でなく、その点について試験継続とすることになった。

5. ラッキョウ

(1) メタベンズチアズウロン水和剤（日本特殊農薬製造）：前回判定どおり。

昭和51年秋冬作で、実・継、実用化一〔露地普通〕活着後20～40gおよび春季雑草発生前～2,3葉期30g反復全面土壌処理、継続一薬量・土壌条件と薬害・除草効果について、という判定を得ている。今回は、効果確認の試験で、栃木農試・福井農試・鳥取野菜試が実施した。その結果、カヤツリグサ・ノボロギクに対する効果不十分（栃木）、20gでは全般に効果不足（鳥取）というコメントもあったが、全体としては、前回判定と同様の成績が得られ、効果は確認された。

(2) トリフルラリン乳剤（塩野義製薬）：前回判定どおり。

昭和51年秋冬作で、実・継、実用化一〔露地普通〕植付後及び春季雑草発生前20～40ml反復全面土壌処理、継続一薬量・土壌条件と薬害・除草効果について、という判定を得ている。

今回は低薬量域（20～30ml）の除草効果確認と、薬害の有無についての再検討が行われた。試験を担当したのは、茨城園試・福井農試・鹿児島農試で、ラッキョウに対する薬害その他はなく、除草効果は20mlではナズナに不足（茨城）、ナズナとカヤツリグサに著しく効果不足（鹿児島）という指摘もあったが、全体としては顕著といってよく、20～30mlの反復全面土壌処理でも実用性のあることが、確認された。

(3) トリフルラリン粒剤（塩野義製薬）：前回判定どおり。

昭和51年秋冬作で、乳剤と同様の判定を得て

いる（但し、薬量は400～600g）。今回は、液剤と同様、薬量の再検討が目的の試験を実施した。担当場所も、液剤と同様であり、茨城で400gがやゝ力不足とされ、鹿児島がナズナとカヤツリグサへの効果不足を指摘したほかは、前回判定の示すとおりの結果が得られ、効果が再度確認できた。

6. ニンニク

(1) メタベンズチアズロン水和剤（日本特殊農薬製造）：前回判定どおり。

昭和51年秋冬作において、実・継、実用化―〔露地普通〕植付後及び春季雑草発生前400～600g 反復全面土壌処理、継続一薬量・土壌条件と薬害・除草効果について、の判定を得ている。今回は、除草効果及び薬害の確認試験であって、岩手園試・愛知農総試園研・佐賀農試・長崎総合農林試が担当した。その結果は、ナズナにやゝ効果落ちる（長崎）というほか、全場所十分な除草効果を認め、前回判定の効果が再度確認された。

7. イチゴ

(1) ANK-553乳剤（ANK研究会）：前回判定どおり。

昭和50年秋冬作で、実・継、実用化―〔促成または半促成ハウスマルチ本畑〕活着後マルチ前20～40ml 全面土壌処理、継続一地域および品種間差異について、で実用化の判定が与えられ、翌51年秋冬作で、再度効果確認と地域性に関する試験が行われている。今回は品種間差異に関する試験をかねた、効果確認試験であって、野菜試久留米支場（はるのか・久留米37号・同41号）、静岡農試（麗紅）、福岡（はるのか）が実施した。各場所ともに、処理1週間後ごろ、

展開中の新葉に縮葉が生じたが、その後は異常なく、収量への実害はなかった。除草効果について、静岡は20mlで可、福岡は不足という不一致もあったが、全体としては実用化可という判定であり、結論的には、実害のない薬害が品種を問わず出ることあり、ということで、前回の判定は変わらなかった。

(2) S-28乳剤（U-クレマート研究会）：前回判定どおり。

昭和49年秋冬作で、実・継、実用化―〔促成または半促成ハウスマルチ本畑〕定植後及びマルチ前20～40ml 反復全面土壌処理、継続一品種・処理時期と薬害について、の判定を得ている。今回の試験は、品種間差異の検討をかねて、効果の確認を行う試験である。野菜試久留米支場（はるのか・宝交早生）、栃木農試栃木分場、（ダナー）、岐阜農試（ひみこ・ダナー・はるのか）で試験を行った。野菜試久留米では、前剤同様の実害のない薬害を認め、栃木栃木では異常を認めずとしている。岐阜では保温開始後に生育抑制を認め、その程度は‘宝交早生’では実害なし、‘ひみこ’でも大した問題でないということであったが；‘ダナー・はるのか’については、再度検討が必要という程度としている。従って本剤の利用に当っては、現地試験によって品種の反応を予め確める必要があると結論された。

(3) SL-55水和剤（石原産業）：前回判定どおり。

昭和51年秋冬作で、実・継、実用化―〔半促成ハウスまたはトンネルマルチ本畑〕定植前・マルチ前10～15g 全面土壌処理、継続一除草効果の持続期間について、の判定を得ている。今回は1回処理の除草効果持続期間を検討する目的で、栃木農試栃木分場・埼玉園試・神奈川県

試・岐阜農試・佐賀農試が試験を実施した。栃木栃木では15 g 以上で十分な効果があって、50～55日程度それが持続し、埼玉では初期殺草の効果が大きいので、60日後も残効あり、神奈川でも15 g 以上が必要であるとし、岐阜ではハコベが残るほか全般に実用性がないほどに効果低く、佐賀でも10 g は不十分であったが、15 g 以上で十分な除草効果と持続性を認めるとしている。従って今回の結果から、処理量は15 g 以上のほうが除草効果大とみられるが、20 g では減収が認められるので、これを加えることなく、前回判定どおりにとどめることとした。

8. ニンジン

(1) S-28乳剤(U-クレマート研究会):
前回判定どおり。

昭和49年秋冬作で、実・継、実用化一〔冬まきトンネルマルチ〕は種前マルチ前20～40ml 全面土壌処理、継続—温度と葉害について、の判定を得ている。今回はマルチを穴開きと普通フィルムの2種類として、埼玉園試入間川支場で、また処理時期をは種後3日とほう芽後処理とする試験を長崎総合農林試で実試した。その結果、埼玉入間川では両フィルムとも20～40ml で実用化可能であり、20ml で十分との結果が得られ、長崎では両処理時期とも実用化できるが、ほう芽後処理は、マルチ処理と両立しがたいのではないかとしている。従って、前回判定はそのまま実用化可のことが、再確認された。

9. レタス

(1) ジフェナミド添加フィルム(三菱油化・みかど化工): 継続—試験年次不足。

一連の除草剤添加フィルムの一つで、イネ科雑草に効果大、広葉雑草にも有効であり、ナス

科・バラ科に選択性をもつジフェナミドが選ばれた。昭和43年の秋冬作で、ダイミッドシートという製品がイチゴで試験されたが、本品と同一物ではない。茨城園試・埼玉園試・千葉農試南総園研が試験を担当したが、埼玉でフィルム表面の凹んだ所の株で葉害を生じた。これは薬剤の溶出・流入によるもので、この種のフィルムで常に問題となっている。除草効果については、茨城・埼玉が十分(但し持続期間は前者が約30日、後者が試験終了時までと異なる)とし、千葉南総は不十分とわかれ、実用性の判定も前2者が可、後者が不可とわかれたが、試験年次不足で継続となった。

II. 野菜対象生育調節剤(含資材)

1. イチゴ

(1) カルパー粒剤(カルパー普及会): 継続—試験年次不足。

過酸化カルシウム50%の粒剤で、消毒の効果、根の生育促進効果などをかねた薬剤として、レンコン・メロンなどで試験されてきた。今回はイチゴのトンネルマルチ栽培で、移植後の初期生育安定を目的として、試験が行われた。担当したのは、埼玉園試(ダナー)、兵庫農総センター農試(宝交早生)、佐賀農試(宝交早生)で、いずれの場所でも葉害は認められなかったが、生育・収量については一定の傾向がなく、特に処理の効果と認められるものはなかった。イチゴについての試験は、始めてなので試験継続と判定された。

2. バレイショ

(1) エスレル+ジベレリン液剤(2,4-D協議会): 継続—試験年次不足。

昭和51年春夏作から、花き球根の休眠打破と生育促進を狙って試験が行われている。今回はバレイショの種いも浸漬による、休眠打破・ほう芽促進の試験である。試験を行ったのは、広島農試とうしょ部試験地と長崎総農林試愛野馬鈴薯試験地で、広島では処理による生育促進と増収の効果を認め、特に植付期の早い場合有効であったとしている。本剤はエスレルのもつ休眠打破作用と、ジベレリンのほう芽促進作用が、相乗的に働くとされているが、これによって秋バレイショの植付期拡大が可能になると考えられている。又種いもに20～60gといった、くずいもの全粒利用も可能になるという利点もあると指摘された。長崎でも、同様の効果を認めたが、品種によっては（ウンゼンなど）収穫いもの長型化するものもあり、極早掘栽培には不適であるなど、品種による適応性の差異を検討する必要があると述べている。全体としては、初年度試験なので、さらに継続の判定となった。

3. ダイコン

(1) 〔ポリエチレン+CaO₃〕フィルム（サンブラックマルチ）（日産化学工業）：継続—試験例数不足。

ポリエチレンに炭酸カルシウム粉末を混合して作成した、マルチ用フィルムで、使用後の風化によるほう壊、あるいは焼却処分の可能なことなど、従来のプラスチックフィルムの欠陥を補う目的で開発されたものである。昭和51年春夏作から試験が行われ、レタスなどでそのマルチとしての有用性、易破壊性は認められている。しかし、地中に残存する部分については、それが次作以後の野菜に、どのような影響を及ぼすか明らかでなく、特に根菜類には問題があるのではないかと思われたので、山梨農試で検討が行

われたのである。すなわち、フィルムを約5cm角に切断し、深さ30cm程度に、なるべく均一にすきこみ、（9月18日）、9月20日にダイコンをは種した。その結果、発芽・初期生育に異常はなかったが、すきこみ区のその後の生育は遅れるようで、岐根率もやや高い（無処理区12.8%に対し16.8%）ようであった。地中に入ったフィルムは6月上旬の時点では、末ほう壊のまま残っているという。試験年次が不足なので継続と判定された。

III. 花き対象生育調節剤

1. チューリップ

(1) ベンジルアデニン液剤（興人）：継続—試験例数不足。

周知のサイトカイニンで、促成栽培チューリップのブラスチング防止による品質向上と収穫率向上を図る試験である。埼玉園試が6品種を用い、作型3種と組み合わせて試験した結果、ブラインド防止効果はあるがジベレリンには劣る反面、ジベレリン処理のように、生体重・花の高さ・葉の高さ・脚長・花被長・脚径・花首径・花被幅等に悪い影響を及ぼし、品質低下を招くこともなかった。本剤は又、暖房下での花被の反転を防止するという働きももっている。ジベレリンとの併用により、ジベレリン単用より品質は向上し、反対に本剤単用の薬害（本試験後溶媒を代えることにより回避されるようになった）が回避され、おのおのの薬量を減ずるというメリットがあり、適正処理量はジベレリン100ppm、ベンジルアデニン25ppmの混合処理であった。又低温不十分な球にアンシミドールを処理した後、この混剤で処理すると、著しいわい化効果がみられ、はち物用としての品質向上を図ることがで

きた。以上のように効果は明らかであるが、品種間差異も若干認められるので、さらに例数を重ねることを求める判定となった。

2. 洋 ラ ン

(1) ベンジルアデニン液剤（興人）：継続—試験例数不足。

前記薬剤で、開花促進と着花数増加を目的とする試験が行われた。試験は2年目以降で、可及的若い株を対象とし、9～11月処理するという条件で行われ、愛知農総試園研が担当した。その結果、リードバルブの着花数は、10月中旬以降の処理で明らかに増加し、処理時期の違いほど効果が大きかった。しかし着花節数・小花数・開花期に対する影響は認められなかった。バックバルブについては、リードバルブにおける様な効果は、いずれも認められず、開花期の変動した前年の結果と一致しなかった。これは最低気温の関係で全体に開花が遅れた結果と思われるが、本剤の効果として安定しているのは本来着花しないような、未成熟リードバルブに対する処理と考えられる。品種・株の成熟度にも関係すると思われるので、さらに例数を重ねることとして、継続の判定が与えられた。

3. サボテン（シャコバサボテン）

(1) ベンジルアデニン液剤（興人）：実・継、実用化—〔シャコサボテン〕短日処理開始5～10日・100～200ppm/7～10ml/鉢・全面散布（高温期散布はさける）、継続—温度条件・株の生育との関係について。

シャコバサボテンの着らい数・開花数の増加を図る目的で試験された。試験を担当したのは埼玉園試と愛知農総試園研であるが、本サボテンの特質上、愛知提供の材料が、埼玉でも用い

られている。埼玉では、着らい節数が著しく少なく、全頂端基数のうち、着花したものは23～30%であった。従って落らい数も少なく、ほとんどが開花したため、本剤による全株着らい数増加の効果は明らかでなかった。しかし3年生株については効果が認められているので、本剤の目的である未成熟株の開花促進を図るにしても、なお供試株が未熟に過ぎたと推測された。愛知では、短日開始5日後処理区で栄養芽が多生したが、10日後100ppm区では、着らい茎節数・着らい数・開花数が多かった。これは、処理時の高温の影響が現われたものと判定された。自然咲き区では、9月25日以降処理で、つぼみ数・着らい茎節数ともに増加した。以上の結果と、この技術がすでに試行的範囲を越え、現地試験的成績が多数得られていること、本シャボテンの栽培地が限定されていること、試験場成績の結果などを考慮して、上記のような判定が与えられた。継続事項中の温度条件は、処理時期との関連が深く、地域ごとに、又処理材料の生育度に応じて選定する必要があるが、高温（特に夜間の）は短日効果を減殺するので、避けねばならない。

IV. 前回未検討花き対象生育調節剤

1. ポインセチア【昭和52年春夏作】

(1) CCC液剤（三共、日本サイアナミド）：前回判定済（継続—試験年次不足）。

周知のわい化剤で、植調発足以前にトマト・キュウリで試験の行われた経緯があり、実用性はあるが価格の点で実用不可能という結果であった。その後事情が変わって、花き類での利用性が検討されている。草丈の抑制を目的として、ポインセチアに処理されたが、前回昭和52年春

夏作検討会で、東京のデータが提出され、千葉は中間報告であった。東京の成績は、3,000 ppm でかなり草丈が抑制されるという結果で、処理時期・回数の検討が求められている。今回の千葉の成績では、濃度に関係なく草丈で8%, 分枝長で15%程度の抑制効果があり、草丈がそろって品質が向上している。又処理によって分枝数がふえたり、有効花房数が減ったりする傾向はあるが、一定の傾向を認めがたいとしており、さらに検討が必要となっている。

2. 草花類【昭和52年春夏作】

(1) AS-100液剤(旭化学工業)：前回判定済(継続——試験年次不足)。

成分未公開で、種子の浸漬処理およびかん水処理によって、発芽・発根促進、生育促進などが期待されるという。前回埼玉園試の成績が検討され、今回は千葉暖地園試・福岡園試の成績が報告された。千葉暖地では、マリーゴールドとアスター・ケイトウを試験して、いずれも促進効果なく、福岡でもビオラ・エスコルチアで発芽促進効果を認めなかった。

3. 球根類【昭和52年春夏作】

(1) ACP-68-250+GA液剤(2,4-D協議会, 昭和醗酵工業)：継続——試験例数不足。

前出のように、球根の休眠打破による、ほう芽および生育促進を図る薬剤である。前回埼玉園試の成績が提出され、今回残りの千葉暖地園試・福岡園試の結果が検討された。

千葉暖地では、ダッチアイリスの冷蔵促成栽培で効果を認めず、花木類(ユキヤナギ・コデマリ・レンギョウ)で相当程度の開花促進効果を認めている。福岡では、テッポウユリの冷蔵

前処理で、発芽率・開花率の向上をみたが、開花がかえって遅れる傾向を認めた(処理後すぐ冷蔵で軽減できる)。アイリスでは、茎長・草丈の低下などを伴うが、本処理によって開花が促進され、開花率も向上するなど、実用性が高いと判断し、適正薬量はエスレル250ppm + ジベレリン20 ppm程度であろうとしている。さらに実験例をますため、継続の判定が与えられた。

4. 洋ラン【昭和52年春夏作】

(1) AS-100液剤(旭化学工業)：前回判定済(継続——試験年次不足)。

前出薬剤で、発芽・発根・着らい等の促進と開花数増加が期待されている。前回、愛知農総試園研・三重農技センターの成績が提出され、今回は岐阜農試の成績が検討された。シンビジウムのバックバルブを、鉢植えとして処理したところ、発芽・発根・生育のいずれについても、効果は認められず、所期の目的は達せられなかった。

5. 花木類【昭和52年春夏作】

(1) ATRINAL液剤(日本ロシュ)：実・継、実用化——〔花芽数増加……クルメツツジ・サツキ〕開花終了後2週間以内(開花開始期～2週間後まで)0.4～0.6%, 5～10 ml/2～3年苗1回全面茎葉処理、継続——他のツツジ類およびサツキの品種間差異について。

本剤は、成長抑制効果と派生的な花芽数増加効果を持つ薬剤であって、前回埼玉園試・岐阜農試・三重農技センターの成績が検討された結果、上記のゴジック部分を除く内容での実用化判定が与えられた。その折残された野菜試久留米支場のサツキについての試験結果が、今回報告された。サツキ(熊野)の3年生苗に、開花

終了時・同後1週間・同2週間に散布処理を行ったところ、花房数は著しく増したが、散布時期によって差があり、開花後1,2週間処理のほうが有効であった。しかし摘心効果は小さくて実用性はなく、分枝増加にも効果はなかった。したがって、花房数増加については、前回同様の効果が認められるし、前回判定分の中にサツキを加えることになった。しかし、サツキには各種生態型の品種が存在するので、品種間差異の検討が、継続事項として加えられたのである。この判定によって、前回の保留事項、サツキについて、は消滅した。

6. 洋ラン【昭和51年秋冬作】

(1) EL-531液剤(武田薬品工業)：前回判定済(継続——試験年次不足)。

土壌かん注処理によって、草たけ伸長の抑制を図る薬剤で、前回埼玉園試・岐阜農試・三重農技センターの成績が検討され、試験年次不足で、試験継続となった。今回は残された愛知農総試園研の成績の検討であって、本剤の抑制効果には品種間差異があり、‘フォーミダブル・ガットンサンレイ’では明白、‘モントローズ・ノドカ’では若干という程度であった。他の品種(スノーフレイク・フジ・モンローズ・バーモスグローリィ)では、明らかでなく、これは処理直前に移植したためか、処理時の茎長が長すぎたためと考えられた。又処理の開花に関する影響はなかったが、前年処理した株のリードでの開花率が、処理区で若干大きいように感ぜられた。しかし、処理との関係が明白とはいいがたかった。

昭和52年度秋冬作芝生関係 除草剤試験成績概要

財団法人 日本植物調節剤研究協会 技術部

昭和52年度秋冬作芝生関係除草剤委託試験成績検討会は、昭和53年6月20日(火曜日)、にのみやカントリークラブ(栃木県芳賀郡二宮町大字三谷857-1)において開催、試験場関係

者等13名、委託関係者24名が参集し、除草剤9剤(44点)について試験成績の報告後、質疑応答が行なわれ、慎重な検討が行なわれた。

その判定結果は次表の通りである。

昭和52年度 秋冬作芝生関係除草剤供試薬剤および判定結果一覧表

薬 剤 名	有 効 成 分 および含有率	委託会社名	対象芝生名	対象主要雑草名 ； 処 理 方 法	試 験 場 所	前回 判定	今回 判定	今回判定理由・ 内容・その他
1. AK-50 水和	N-(1-エチル プロピル)- 3,4-ジメチル -2,6-ジニト ロベンゼンアミン	クミアイ化 学、日本サ イアナミッ ド	コウライシ バ、ペント グラス。	一年生雑草全般 ； 50, 75, 100 g/a； コウライ：雑草 発生前～発生	〔コウライ〕 千葉農試、に のみや、程ヶ 谷、スリーハ ンドレッド、	継	実・ 継	実：〔コウライ シバ〕一年生 雑草(キク科 除く)、雑草 発生前全面土